北條五代記

巻五

ヲ之号

江洲
野一番

北條五代記巻第五之目録

北條氏直と滝川左近将監合戦の事
関東昔侍取義異様なる事
下総高野台合戦の事
八丈嶋へ渡海の事
江雪入道一興の事付男女別の事
清水太郎左衛門大力の事
昔矢軍の事
松尾の菓への事付山上宗二か事
前陣軍に討負二陣まて切勝し事

北條五代記巻五

一 北條氏直と瀧川左近将監合戦の事

聞しは昔尾州織田三郎信長。永禄年中京都へせめ上り。三好修理亮を追討し義兵をあげ。天下に威をふるひ。位を上三位大納言兼右大将平朝臣信長公に任じ。関西をなびかし。諸国の天下掌なれは甲州武田四郎勝頼敵対するによつて。信長公天正十年の春甲州へ発向し給ひ。同三月十一日勝頼太郎信勝父子をうちほろぼし。猛威を遠近にふるひ給ひぬ。相州北條氏直は信長公と兼て一味。勝頼とは敵対か

まで見まよそて信玄公と合戦して遠州へ出馬の不
意に勝頼方の城ある興国寺三枚橋古城ハわきを退ぬ民
又ハ浮嶋原吉原まてこと〳〵く富士の麓々里
々村々を放火し陣をとり又勝頼と一味せる西上
州の侍ともいさかひによりそれ〳〵藤沢へ道しすゝ
そめの衣をき甲州へ来り浪人と成て信長公へ出仕せ
しむ氏直名代として北條陸奥守氏照甲州へ来参
し大夫三十騎馬五十疋を上る上信長公陸奥守
に對面ありて陸奥守廣がく此国を守る信長公ハ甲
州より引返して近江安土乃居城へ馬をおさめ給ひぬ

西上州仕置として瀧川左近将監一益をさしをハる。
此上関東方の儀にまかせ奥州まても手に納次
第切るへき命令を瀧川信州小室へ居てれより
上州箕輪へうつりて後同國前橋の城にまて居る隣
乃侍をとしも雑下におなしく倉賀野淡路守内藤
大和守小幡上野守由良信濃守安中左近大夫深
谷左兵衛尉成田下野守上田安房守山吉江口守。
木部宮内太輔長尾新五郎なとみな瀧川か下知
にしたかひ其者の人質をとりて箕輪の城に
へおくいされけるのふめしさ瀧川か威風をとる

がおこし逆心にて信長公信忠公父子京都にをいて。
同年六月二日。明智日向守光秀がためにころ
され給ひぬ。此よし上州へ告来る。滝川きゝて。おど
ろきしが。智謀武略の者なるゆへ上州の侍共をあつめ
此義をかくしければ。在々の備をさせ。急ぎ招
よせ滝川いふやうは。去月二日信長公父子。京都に
をいて明智日向守がために討れ給ひぬ。滝川
京都へせめ上り。主君のとむらひ合戦し。日向
守を討んとおもふ所に。はや西国より羽
柴筑前守秀吉。柴田修理亮勝家が
越前よりかけ上り鎮國なれば討て上るべし。上中
の者ども二七歳より馳せだい。滝川にとし月くれ
をとらん事安かるべし。然ども小幡氏直氏義と守
上州へ出馬あるべし。然ば是非に氏直と合戦を
なし上州諸侍一味すべきぞ。さうさうにいそぐべき也と申上
州勢ひしひしと出張。滝川氏一大事とぞ申けるぞ。
各々申さる事義をまもり。滝川をたすけるべき大将
なりとぞの御威光まさり。氏義天下にまで及び。
滝川を背くの者へあり。滝川がほそあめに宮せず。たとへ
しかし後へ應も角もわきま。一味せずとんべ討給ふべし

もとのごとく一同して瀧川ぞしゆうをゆるさしきこえん
ねんごろ桔梗のあひをなしていそく氏政大軍にて
よせきたるとき一合戦のすゑハ多勢に無勢なれバ
勝負を決する事ハ士卒のはたらきと一つに
すぐれたり上一方に向ひを決し一方ハ断然に
勝事をうれハ武略のかたきひとへに天運を
守り名をおしく死をかろくするをもつて義
とせり氏政浩くさゞれ敵に乱を
のがれ味方をしるよかり瀧川に加勢へ
使者をつかハされたりハ当月二日信長公

京都において明智日向が為に討ぜ給ひぬれバ
即ち瀧川京都へ上り惟任をうたんのぞミあり。
前橋の居城をわたすべしと急ぎ来べく請託
らるべしとて武州鉢形の城主北條安房守氏邦
へ使者を遣ハし安房守はしゆうをゆるし梯ハ瀧
川上野へおもむけりしまた西上州をへだてれ
一人して切てとらんとぞまれにさらに氏政出
馬をもよほし前陣ハすでに上武のさかひ神
奈川と越金久保までおしよせる氏政氏直也
かへりと小田原を打立先陣ハ倉賀野石神に陣し

氏政ハ安房が陣場二里こなたなる本庄に旗を立つ。後陣ハ深谷熊谷小泉にて。然るに瀧川左近将監も。倉賀野の方より来る後陣也。西上州衆ハ前陣おぼつかなくぞ見へし。安房守が無勢を見て。氏政ハいまだ出馬なし。安房守が一千の軍ハ物の数ならず。ものハざ打ちらさんと。一同しにむかひしさ。六月十八日の巳の刻より互に合戦を始め。上州衆切勝。安房守か敗北し。二百人程討れ。味方の陣へ乱れ入る。上州衆初合戦はうち勝。いさみかひたる所に。氏政悉く見給ひ一戦をとりかけ。金久保へとしよする。軍勢

高慢なる事雲霞のごとし。上州衆大軍を見て肝をけし。重くかまへべき事。鉢形の郷が所。なるべしとも。悉く居城へ引退くべき所をわびハせ。瀧川是を見るとそれざりける所にて云なるは。前陣の合戦に上州衆切勝事。まかれ天下に披露あるべし。さりながら後の合戦にをそくハ瀧川前陣仕べし。上州衆ハ後陣に待べしと云て。倉賀野のとまりに打立。先勢津田次右衛門尉。舎弟郎。同理助。瀧川義太夫。篠田次郎。牧野伝蔵。佐々忠右衛門尉。栗田金右衛門尉。岸交右衛門。

田市右衛門尉平三。太田又右衛門尉。稲田九蔵。津田
小平次。其勢三千余騎中はもとより。玉村倉久保
の方へよせむかふ。滝川馬よせしは。金の三がいぞんごせ。
党を正先に立。大敵をわきまへしてさし。党らんと極し
えらぶ。猛強の大将也。滝川鴾毛の馬に乗。ざいをとり
ひらふりけ。鑓をもちてれく先にすゝみ。かゝれくと士卒
といさめ下知をなせとも。滝川が家老篠原平太
衆門尉。前登にすゝむ。わかれうて掬は篠也。若中
の者共篠原をとゞめよ。されとも滝川が人数ただ一ま
とはよく馬の馳たるをなしへ。氏直数万騎

をせむかふ。正へましくて。面もふらず切てかゝる。氏直
先手は。松田尾張守。大道寺駿河守。遠山豊前
守。垪和伊予守。山角上野介。内藤紀伊守。福島伊賀守。依
田大膳。南条山城守。清水太郎左衛門尉。伊勢備中守。松
田肥後守を先として。かゝる所に。追つまくりつゝ首をとられ
ければ。しかして滝川すでに討負てしりぞきけり。勝
に乗て。いきほひ追かけ切ふせ。首二千余人
討取。上州の衆は滝川に与せしかども。かなはじとやおもひけん
厩橋へ引て。滝川その夜は。箕輪にさしてまかり。残
党をあつめ。酒宴し。鼓をうちならし。滝川扇をとり

て舞ふるごとしや。暁天いまだあけざるに其縁を
打立へおもむきけるに先に室町より進み出し。
其当座を興く。伊勢の国は北条の氏綱が
治るところなれば多勢にて勢ひ盛んなり。
義をおもんじ命をかろんじ一合戦し始終をよく
おさめたるとぞ人感ぜり

○関東者侍所義與なる事

凡そむかし相模小田原北条家諸侍。仁義礼智
信を専とし。取義絶清くして。源平両家の古
礎をしたひ八十氏の風流をまなんで天下に

をして。家しかども終に前因をかんじて果をなすもの。
高下をたゞさず人の後での名聞をおもく。土を敬ひ
下を憐み仁義を本とせり。故に弓馬の学びをこ
のまる事なし。並なるは氏政公正月七日に弓場にを
いて弓はじめあり。諸侍大学頭をおとし。村をつらね
其後七八日に鉄炮はじめあり日本無双のうでの武
芸をあらはせり。又は犬の馬場と号し長さ五十間。
横三十間に犬を放の馬場あり。村は出て
をさし馬に乗。犬は二十疋三十疋をはなしひいて
ここをはれと矢数をあらそふ。是を執

刑とぞ大学に一家仁なれバこそ一国仁をおこすと
あるがごとく民並に仁をとりなへてさうし給へバ諸侍仁を
をこなふ。仁者ハ山をこのむといひて。山ハうごかざる
ぜんみんよあつまりて。草木禽獣生ずるがごとし。かゝる
がゆへに仁ハ五常のはじめにして。義礼智信の四つハ仁
の用なり。釈名に義ハ宜なり。万物を裁制して
宜さにかなはしむるといへり。義の字の心ハよろしさ
云字の心。万事よくおもひ分てそれ〳〵に従しく
せよと也。孟子に辞譲の心ハ礼のはしなりといへり。尊
卑の差別長幼の次第をたゞしうやまひおそれる而
礼のはしなり。礼ハ朱文公ハ礼の本ハ敬にありといへり
又智者ハ水をこのむといひて。万事に通じ
るが智の字の心なり。論語に人として信なくんバ
その可なることをしらず。大車に輗なく小車
に軏なくしては何をもつてかゆかんやといへり。王龍谿が
仏家の五戒をもつて。則儒道の五常とひとしとやさ
まして五常の法をのべ。当て難し。礼記に礼儀三百威
儀三千といへり。周公旦の作りたまへる儀礼と云物なり。
礼義が三百條あり。威儀の立居ふるまひが三千條
ありそれより又書くはへたる礼義の作法がおほくて計

されども。今は関東諸侍常に礼儀をみださず。敵
味方にわかるといへども。大名高家の人をば常の物語にも口さ
がなくいはず。いへども未だ不見の人にはわたくしにいふ事も。
道路の辻山野曠野の往来あらば互に会の儀
あるひは上臈おほく神社仏寺などの前にして。はかなりとも
下馬をなし。ほかにはいたりて礼儀を振舞
坐りようく。踊躇の礼。終日をこそかへれ。君臣の
礼いよいよおもんじ給へば。諸侍の形儀正しく礼に非
ひし上下の。むざのため礼儀。衣紋のくさをもつ
ど。小田原にいさへぞや常の教に云

賢臣二君に仕へず。忠臣なんぞせざるをもつて。洪狼と
もといひて。侍る人は。わか若たに。羞恥をたし給ひね。
東海経に云。東海黒歯国あり。是俗婦人歯を
そめくろくそむ。とこ采もするに。日本東海中
国なればとて云こ。昔関東敵味方合戦し。首
実検の時。かたくろの首をば。ねの首さらくせ上へ
首と死に戦場へ出るには。討死をとんげ。楊枝を
わらいぱたくろをもはしはせり。いにしへの京盛は
びん髭を黒にそめ。小田原北条家の侍は。なにぞ
ろをも。古今ことなれなども。さきしはなればずさ若

なら物又ハ円じさしと名付く。末をもて大きさり
本だにさをも継りぐもはじめくぐりら毛をね
さし又鬢の毛のわひぐさとぬこさもし皮肉の兄が
あ程みして鬢をぶびらんせさみくびんとなる。
流をわけ頭へ里若衆本是ハ鬢さきをりとぶ
さのまづくふゆひに又流げぐこごく別りろこちさ
をちらへぐもとりもちでこもとせて記ふさな
どのぐくふ継り付鬢してゆひ家豪をところふ
きぐのけありんと名付てなろくろ引流くろひ茶
里とせるの中かぐのゆ色のけて膏肓の

奴の兄ゆるかとに着しぐしの後の前をむすぶ。
うろぶしをわけてさ分るに前後の前りん流にさ
ぞれぬぶしの名ぞ寸六寸かどろし也世ぐ又年
以前まで、関東諸将の形儀風俗丁寧にあり
こそ名流まとじの着こなしに抱結なせバ若
き衆やまて礼義の事ハさもこそわらめ昔関
東侍の形義やさかへしさりよ今見る有さまハ
みといひて気ぶ笑見なれし無念もどんする
なきんぎさりやわらん事も時の風俗と後
なひてよかるべし

○下総国府台合戦の事

かくて後に相摸小條氏康と安房里見義
弘とのあはひ不和なり。太田美濃守資正。武州岩付より
あまた謀叛をくはだてて。義弘と一味せられけるによりて。
義弘義高父子。下総の国へ発向して。国府台
をもつて陣とさだむ。この国府台といふは
國府台小弓代々の城なりき。今度の者は
とくかる城台と書しをもつて文字面にあひて
あたりに城あり。武州江戸より小條が家臣遠山丹
波守。富永三郎左衛門尉。世にかくれなきの
川を前にあてて。それより下総小金より
太田治部少輔出向ふぞと聞えける。此由小田原へ
告来るによりて。小田原の城の留守居として
小條幻庵。松田尾張守。石巻下野守をのこし
おき。氏康は時日をうつさず。氏康氏政父子
出馬して國府台を中にへだてて向ひて陣取
給ふ。里見義弘敵中におそれて引退り
ぞくぞく若者どもにて氏康先手に流れかゝり
いさみ勢を出し。敵は國府台と二里ほど
引てそれへかゝり。味方は色をとるに遠山丹

永見軍監へ乱れかゝりもみにもみ敵将清ゐるいしきな
まことにはかりに門しかるにひに死をわすれひそて
うに敵がしに正木大膳といふ門て正はんほます
ミ押よとみでし切てうち味方の門まで渡中せらる
幸山丹波守父子蜀永三郎右衛門新山角右衛門
左衛門尉太田越前守中條出羽守河村修理亮を
はじめ百余騎うたれ敗軍まで民政旗本二階に
ひるがへして云敵らは多く長途とゞる
兎を討べしと團扇をかげ給へば命は義によつ
て軽し命をかへりみず一足もひくまじかりしがふ

責くるにぞでは切て門し敵を追散し首三
十討捕て陣に旗を立られ大軍の威敵
を民政旗本にて切ちらし事前代未聞
の猛き諸卒感し民康は後陣にて
此義を聞し民康諸老を召あつめていはく
幸山蜀永を討せ無念なり月日を経さ
せ一戦とぞべしと評定しけるか民政涙をなが
し戦場の有様ひしと味方敵を切て門し敗北
せる時郎従二人敵のまぎれ陣中
をなかくまれ是を取て二人見届てやらせ

敵先陣のそなへをうちやぶり陶山備前守を討取。そのいき
ほひにのつて後陣へおしよせ、わが勢をしたがへ乱入し、
寝ずして千秋万歳とうたひ、手に手を引多く。
其後へ陶が悟もなく、さまざま世すべき事を
しづかにさまへむかへしは、陶を始め諸将は主人の左右を
もちいず、軍法の天下をしてはつくして、義をみ
だりにし祈をしりぞく。是義弘が運の末なり。されば
ひとへにまよひくわしきや、味方急によせくるに
敵は敵の前勢は後を下りて向かふべし。次の
勢は果たして立。後勢へ後に残り三所にて前

士のまもりいを後の士卒たり、先抜をもちの事
なり。前一手は轡卿が斧をもきを切べしと
ありくは後はいつも旗の合戦にをそしと。
民政前陣とし、民康はあとにていくさ後陣の
割のまもりひとつぐるに、敵は東方に陣し
多くの兵とかくやうも西より。味方西より向く陣
先をおさへて事を是孤虚のひきまへ旗しるゝが
ゆへ陶山家政勝利をうるなひをもたらす縁に今
卑族の刻もむ東敵は入日にむかひ、味方の後陣は
敵さしは時のうしろなり。吉事をとへもりしを上策

年ハ甲子なり甲子ハ殷の紂がほろびされ武王の勝る年也義弘ハ紂に同じ氏康ハ武王に比して討んとすまじくなしといへども祖の吉例をしる事氏康永正元年甲子九月武州立河原において上杉氏乃大輔顕定と合戦し討勝て顕定敗北せしも頃く又氏綱大永四年甲申正月十三日武州江戸にて上杉修理大夫朝興と合戦し討勝て朝興を追討せし就中此年も月も甲子正月八日は吉が吉例なり猶又氏綱天文七戊戌十月七日国府台にて小弓の御所義明

と一戦討勝て義明をほろぼされしぞかし其外の勝利かず〳〵ありといへども先例をもてのまゝよろしかるべしされ孤虚支干相生をしらるゝ事は天の心をしる所なり時刻をうかゞへりといへども三日に一戦に治定し給ふ是より東は足柄を限りに山岳相思し諸勢を二手に分て旗本は先陣なり氏政は単騎にて卒し惣勢を率て三里下へ打廻り惣勢を取まく給ふ敵をまつ所に討捕べきにてもなかりし所に惣へ使して敵を見とらへたる敵は是をさとらず義弘は新しくていそぐらし辰の刻の合戦にかゝ

に勝利(せうり)をえたり。里見(さとみ)が臺山は安房(あは)上總(かづさ)の合
戦に何時も先陣(せんぢん)にすゝみける大将を討れ
されば敵(てき)はまくれとも前陣(せんぢん)のそれへはさそ引(ひき)
ありぞこねらん。曉天(げうてん)よりかゝりめさの瀬(せ)を越し
いさかひよの日又一合戦(かつせん)しけとく是(これ)を討かれば
さん事そのうちにわりと。觸にて日もくれ
かけ小雨(こさめ)そゝぎ、されば止(やと)めあしにきを休め
そとめるひとを寝ざめ(ねざむま)より水草よいの日の合戦(かつせん)を
心げりとも思ひよるこそ運命(うんめい)流くる。時刻(じこく)
到来(たうらい)すれば、はゝ永禄七年甲子(きのえね)正月八日申(さる)の

刻(こく)に至(いた)りて氏政(うぢまさ)軍兵(ぐんびやう)をすゝめおしよせ、鯨波(ときのこゑ)をどつ
とあぐ。氏康(うぢやす)は直(ぢき)によせめて、又閧聲(ときのこゑ)を二聲よ
わげ、おめきさけんで責(せめ)かゝる。義弘(よしひろ)案外(ぐわい)の仕合(しあはせ)
とぞ續き、甚(じん)? 折下(をりさう)て閧聲をあわせ勇(いさみ)へ分(わけ)
て責めければ、鉄炮(てつぱう)矢(や)さけびの聲(こゑ)。天地(てんち)をひゞ
かし、首(くび)をとりつとられつ、血(ち)はながれて川時を
勝負(しようぶ)もみえざりしが、流石(さすが)に義弘(よしひろ)討まけ。
兵とくもそなへたる安房(あわ)勢(ぜい)切り討(うつ)て討もと
み事(やうぎ)かた、さりにもとも敵(てき)討死(うちじに)の
總(そう)大将(だいしやう)?勝山豊前守(ぶぜんのかみ)父子(ふし)

将監里見民部少輔同井出刑部千本左兵衛次男平
六平七並柘植新左衛門兄弟父子共に七郎多
井信濃守父子伊賀伊豆守多賀越後守を初め
父子余騎討補たり上総国椎津の城に籠る
されば城へさかひ寄とも城を
落しぬ氏政の合戦に氏康氏政父子鎌倉一勝
せらる小勝三郎河越より出て彩月を出
も河東に上総守父子氏康氏政父子助太郎新
太郎若狭守父子氏政の息
是にありて右の一連民康より合戦の

翌日小田原城代伯父幻庵ハ一家の中絶をかなしさ
のせいハかゝる状の文言を写しける者也太田美濃守
も二百騎計なくなりて世を過し今ハ村上をたのみ
て籠しが討れて其の義ハ二十歳にて負東をさして逃
行ぬ是ぞ没落の書に

しかるに其のむかし弓矢の名にさしてかくさ
浮間は太田義清をもつて使をもつて民康に
氏政の合戦に累年の恥辱をすゝぎ謀叛の
張本人太田美濃守を討とりし事世念千万
義弘ハ討死の沙汰もこれなく首ハいまだ来らざれど

件の状に記されし趣には義弘は馬にて乗られ給ひける
に安西伊予守馬より飛でおり義弘をのせ奉り従二
人上総山へぞ分入奉りけるとぞ落人見付家
ても斯て義弘の家馬を見て数の軍兵討死の由定
りかば清さぞかれば房州討もらされの侍共主君を
討せ生がひなべくもとてとかげもなるも七がしの者ども
為になりてや出家し一人もなかりせばなりかかり
義弘三日ぞ上総山を分出房州へ帰城し給ひね
氏康は陣を旗を立
敵をうけんまでなる陣をひきしてかへり

浦の里とよめり合戦毎に粗方を記し侍る陣に
氏康氏政具して東方へ将軍家にそへて居ける
に里見義弘の息子にて御子郎弘次ぞ同生
年十五歳にいちんなりし節毛の駒に乗
とりかくれ一勝せんとて落行の相模の
国の住人に松田左京亮康吉と見てかかりけれ大
将ぞりうどんげとおもはずむちをつけて追付けるが
ちかづくとふんで落かけし康吉剛者なれば
駒の数ごとも せんこそふしぞ首をとらんとせしが
かんびも左へつけて敵のごとくのおへみかり余る力を

たてんもとけだやさしひとるに味方崇徳に随
果て首をうたれんとせしが父よしとも首討
落しさまとにたけき康吉も泪にくれて前後
に迷ふ儘に念ひとゞまる我をはうし其日より直に事号
禅と名乗り念あかざ也百年の栄耀も風前の塵一念
の発心は命後の灯とも浮き三界の輪廻ぞ生ずる處。
無明の眠の中の妄想の夢ざりし此度の仕合にて発
心の種なりめさ後國にて一に出家し浮世と改
名し是後の衣よりも寝ぞひ一節は里見五郎弘次
の紀をとらふ皆人是を見てそれ道心を発せしと云ぬ

世の中は常なきものと知りぬれば名利を捨るゝものぞ
こゝ何しさ世はなれてや身のかくれ家と言ひし人も
是白骨と成るならば門にまかせ世はおもひ成る世を観
ぜよと見ゆる古今集には

世のうきめ見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだし
なりけれと読しも家を捨妻子をもすて世をのがれ
山に入康吉が心ざし感ぜらるゝ熊谷次郎直実敦
盛を討て武士のならひのかなしさに世を逃れて
おもひ西国のいくさよりも熊谷法然上人の御弟子
となりて入道し蓮生坊と名付られし康吉も弘次

と詠じ出家遁世せらるゝ時かゝる人々とさへ見れたるとぞ人
ざしはおもしやさしかりける皆人いへり

○八丈島へ渡海の事

聞しは今は昔伊豆の國下田と云在所へ行ぬるに
ある里人語しは是より南海をはるかにへだゝて八丈島
あり此島は日本の地よりも唐國へはちかく覚えさせられそれ
いにしへと云に其岸けんゆる時分は此島より見れば唐
國は近き里迄て雲霧なれば山の梢見えて國より
別にあるべからずと此島をもて世にかくれなき
是は北條早雲の時代関東より此島を見出し。

伊豆の國の内にて候と北條氏直公時代迄は二年に
一度伊豆の國下田より渡海あるに大船に水
手を乗せ其の世渡る秋は風に此島へ渡る今
年貢をば其の絹を納むるごとくして渡る事は
村田久兵衛と云者いひつけて八丈島へ
渡しけるが今にをいて此島なつかしく覚ゆ
かなし小立てよ忘れてれ命の中をと
一度此島へ渡りてやとて佛神へいのりける
しと云ふ我もなくてむかし治承の比俊寛僧都康
頼入道丹波少将三人鬼海島へ流されし事に古

さて又は凡て此島の男女の色相。皺を見ざるぞ
ゆひもせず汚くものぞとくしらみに限らず。又さ
又黒く眼ひかり。山田小高かし小作り畑とも
されバ米穀のきくひとなし。菜園の青菜もとう
なきハ絹布の衣服もわしませず。木の皮をもつて
て力よ血ちひ。雷のごとくをさきましくし
ておそろしとや恐しもぞ。昔鬼が住みれバ鬼海が
島と名付。又硫黄をゆへに硫黄島と云ひ。されバ
夜日かをさせや。島舟もいまだ行もめぐりて商人
の舟も行とぞ。此八丈ハ舟の渡海まれたる島なれバ。

いかれか夷畜生の栖となりしにや。此島たゝりしく
都しさとハ云ふぞく云てこくハそれバ又其米や〆て
武田板部岡江雪入道ハ元来伊豆の下田の者
言語と史。総て氏政公へ召出され右筆に居たり
まてる筆をまさに伊豆島々の事をよくとしられ
或は伊豆七島の志しいと給付らんと一年江雪語ハ
大島住として渡海の所に住して渡里そぞの
島の事をくじめ物語をハざもしそとの島の様にハ
よそ行としさ云ひしに女房まく白く髪かゝりして出し
取立くひなふ足えもつきぬとやさしくうかで初

口にハおひくしく上その絹をハかさねて立振ふる
波ひ為常に虐数あるくもつれずしさを一目見しより
我も我心地へ身ちかくなる義女にわふ事いかなる神
佛のはは引あはせてやと我身をかへりみるばかりに
くるしくもぐさく賤しく衣裳までもみぐるしそれバ
なまじひて振るもの世にしさふ昔男の業平ならずる中
ねの身さても生れかわりて女房と契りとも尽ひて天に
ありハ比翼の鳥地にあり連理の枝となしてやおぞ
とふは我くも心地ハ天竺唐土日本をそふらず南海
なるみしそびえる綿を世の昔時天人わまくだりし心地

と栖となりしをゆかりの女房あくはれりしゐるぞ
生ざなくふいそでつかでまで容貌すぐれひ
なふぎん世ゆふに庭さしく記のありだ世す
わこび雪れもなる一ツとしてかく此事なまさ
のぞしざれるならべまわくぞれ浮立雲の
そそ也史記に士ハそのまをとしる者のため
身ひらまに女ハそのまをよろこぶ者のそめに
かたちを作るとそるかごとく我国の女ならず
白粉をぬり紅をさしかざりは心地の女房を
生れながらのそれいさを又まてみるくなれる

さだらへていたん成しすかし物をまさき斎藤紙
を引着てあそび遊さしさ路をのこをと
すさり去来よ目かけの女雅物とく踊しき双
しとらしもれ給ひまゝ世のすじころもちぶ。
扨又男ハ女よりかたちうつくしく黒くもきたなさ。
美世人形よ小袖をきさせたなかうづくなれバ
目かけ人もそりよもしんをつくし。女房絹
を織小染家へ貢絹さくおさむる成りや。むかし
より家主ハ女にして男ハ入むこなり。佛ハ文障
三従を説給ひて女よ三所の家なしと給ハ

世界ふるハり。男ふ三所の家なし。幼稚ハ女子を持
ねまゝハよ縁こび。親の家財江縁をわくし男子を持
起れバよくぞの私なり。ひへ鮮よ成ても其事皆
女房のさしづ也。又嫁へ目かけの女房あれバ嫁の
おさきもいりちん立。國家をとりあつかひ。是にゆる
家ハ家の女房とも妻としさふむるゆゑよ。
女房ハ天道へいのりをかけ。我家へ國家ハしまひ
さ神ふ。國家とハ目かけ人をいふ。國家の人ぞが家
の女ハ天道をそうし見。男とかこちあへるもそれぬ。
國家へいる家よりふる事なく、ハらし天竺ぞ

住付くらるる子や親が不通の仕合なく彼
的し二かなしびわへ多くら扨又かなびた紀人へと年
月藤任しがまれけはわすらぬとし我家をする事。
此浦へ付そりしも浦の肝煎へいそこさ来くややく
浦へわざし世話へは國府と舞へさせやんべしは毎
よりすぐれ目も紀の女房の妹へ入せなんべしと。
國府ともなひ。爰この家は一人宛へさらぶを
家乃亭主出合れむこへなりきなや。而まを
いての面目そうり。海國まで八縁とれたりまで
さらくいとまごいして。よの左而へ参りて年月

を送る女房舅親類下人までも睦しく目出度さ
よ染こびあへる事なれども其の上ふかおさわしく子を
きてめでたきるかぎりなく諸人集りてさわやし
それが國府は其の外の者のしまの器よき
て安部更衣かけりよみちるくて景紀のちなさるる
喜見城のそもしひ。是ならず那鄲の夢の心地。
りさるればいかゞせんとおもふのみ。是までは
らしかりしこゝろなり

○江雪入道一具乃事　付　男女別の事

此とし合今。村田久兵衛八丈浦の物語。右かくりしく

せうし御ふ梅又江雪へ名ハ絵にも紀りそしるしなかりず。
絵の者ども此絵をして見せんと。筆者ハ八瀬を
なくし定家を舞鶴へ思をえまとりてや定家ら
彼らと云所にて。雑中をたへまりてるもあく
も形ハ仰れて矢つくるの是ぞさいく幕の頁へ入れバ
絵の者ともも先をみて梅も添しやまへハまつり
絵ふもげるの面白や小國花の絵をぞしめくて
多くの何事ろ先をまさりんと云江雪へ名絵の
方角を知ららるも所よ。形ハ発へて此絵ハ日本
しらハ書。末申ふわてりそれバ伊豆の國より紀

州熊野へちくれ坂く此江雪云新勅撰ニ
和田乃原ゟなとも此ほとりお三熊野の浦の南ハ
山のしもなりとて入まいらせれバ此絵乃女房。
形ハ漲くしくゆうみから雅ハ人なまはしもど天人
ゑぞあやまつる。昔天智天皇の御宇大和の國吉
野の山ハ天人あまくだりて琴を調して舞をなさせしろた。
人物なふ山なれバ昔しく天上へ帰りたる大裏
まで五節の舞と云事御ろきを天人の天乙女とさまる
此絵ハ新拾遺集
袖ふる天津乙女もおりしいまぞおもし雅の昔の

しかりといへども猶ありて天に在し嶋ハ不足。
栖とせるらや嶋ハ人の世ゝにあらず。しかれども丈夫麻
商山の四皓が中にの世界に入ぬらし。商山の
四皓ハ橘の木の中に楽しむ。橘のごとくの世界にぞあらん
さるハ八丈女橘中の仙人乾坤の外にて別
世界也。是ハ我朝の人に知らしめて
梵語漢語とも和語とも唱へ事まで
から音清盛公頼朝公の時代に近き流人
相模の国西ハ鎮西鬼界が島なれば流罪
東が島南ハ伊豆の大嶋なれバ遠流の沙汰なりしぞ

此頃延徳年中早雲宗瑞伊豆の国を治給ひ
しまでも八丈嶋の名をしらざりしを此豆州賀茂の住人
朝比奈六郎知明と云侍ありて是より南海に当て嶋
ありと聞伝へ大船一艘に人多く乗せて伊豆下田
の湊より渡海し彼嶋に着民家をならべし末代
伊豆の国の内たるべき由申上ぐ早雲へ此
よし告たりしかば早雲喜悦斜ならず八丈嶋見出せし
しるしの勧賞に伊豆の国下田の内を朝比奈六郎知
明に下さる永代此所の地たるべしとて今に知
行す孫朝比奈兵庫助下田を知りしが此嶋より際

家は代々毎年の貢綿を納る事ハ千秋万歳なるべし。信濃の男ハ討べく首をかんがへるに朝頼
那須野の狩の時大鹿一頭列卒の内より
かけ出るを幕下見給ひて下河辺六
郎行秀をめして是を射べきよし仰下さる
ところ其矢あたらずして鹿勢子の外に走り出
るを小山左衛門尉朝政射とめをはんぬ。よて行
秀ハ其場にて生涯の恥なりとて狩場より出家をとげ
逐電しけり。されども後に紀州熊野にふかく篤
智定房と号し日夜法華経を読誦しける熊野

那智の浦より補陀落山に渡る所にて一封の状を残し智
定房同朋に託して武州へ送るべき
乃旨申おきけるを紀州糸我の庄より是を持来
る。天福元年五月廿七日に鎌倉へ到来して武州
此状を持参して周防前司親実
披見す。去三月七日智定房熊野那智の浦より
補陀落山に渡る。在俗の時より出家遁世の後の
事を記せり。将軍家も不便におぼしめし武州ハ
弓馬の友なりしをあはれみ涙を催し給ふ
もろもろ感涙をながしけるとぞ。弓矢の名ハ毎に

まして是ハ智通房が家并ハ舟屋形をもとめらん。
又中への縁より打をりて皆打付ての扉も
なくして月の光を見る事わすれぬぞ灯よ
しるべし。三十ケ月の飲物ものなびハ池おハびける不
思慮ともくし補陀落山と云ハ南方海のそてよ。
そもしむ世男たるしるやわざくる是八丈嶋の事
なるべし。智通房ハ嶋へわたり天し女と契りをむすび
それより男をわきまへつたち日本の風俗をまよ
なびわたる是ハまや三百八十余年以前の事也。
わが嶋なれし。然ども嶋まで父母女子ともふるす

又来ハ女のうし昔をもしめし唐の玄宗皇帝
位の時天下の父母なる者娘をとうまん事なし。
御神へ祈まで祈けるふ長恨歌ふ記井ふ天
下の父母のゝをして男をうむ事をよろこばせず
女をうむをよろこばせむとも哉相女も
ゐくさ事なりとやいされし楊又女ともいふ楊
妃も年ニ嘗て國の女わけ知もとかやこ
よう嶋を息せんとのぞ子をとらする娘を織出し
あくたんハ智入れせらるい女房のいひつけ末代
家の系図かりつとある者かゆゑれハ娘をの女房も。

我劣らじと思ひて自ら継で縞となし是を業とす
事とはなりけり根中二年浴衛し。二年目
の夜菊風を詠えて母を思ひ出んと出ける
にこれの里へ枕なるべし女房のゆるをまたぜも
下人ままぞしまぬ名残を残し須磨へうつり出でまうせぞ
と浪に寄ひてし。母は或対様にまぞう我へと
もて遊びさえまふべしや。何流さるの自ゟ
人のんぞや今生の名残見まで。かゝ後の世に
わひりん事もとなし。己もりし。母でも
まつてま教へとなりけさふる報。なとへんや

うきなりけるぞそれ恋路と云事は思ふとなりく
れいけをとせり。後撰集り
思ふれとも又よいそひりの我恋の損や思ふ人
のむかまでと平道盛へよめる拾遺家への哥よ
うら山し声も料しまでの猫のんのまく
り妻あるかと詠ぜしへ。丈鳴の恋路ま思と
なりぬと國寂もさすか岩木ふわし孫ぱへんよりて
を母と出しりへ。それ一樹のりにま宿まてへ。一河の
ながれを汲まさしとりへば名残を惜しむなる
ひそかし褒姒一笑びまそて幽王國をうしなふ。

玉妃はしばしありて玄宗世を失ひ給ひぬまし
てや此女房達は人間のはかなきちぎりも何か是
天人あはれでいで優曇花なる三年の契りと別
こなればさ哀の苦しさも是はいかく成ぬべき。
悲哀もの也はれなげなり。くさりのおもしろし尺迦菩提
の也はいふかく十九にして城を出給ひしおやし
ゆずり給ふ王位を捨て山に籠り給ひし。佛も
くのおそしいそんや老まをやしなひまうしたる
かくれなきさかりの心を得て月を出てられね
風情なり今雪へ是をとりて何とて母はいを
その罪なるぞかくい奴原が名残の御苦一とは海
為相なるゆゑにとかり力を授て龍神をも
まち給ひなればちのとよんぞ母を出て陸
あくびのさをふさ敷ならずくと戒の琢を
はくやむきゆきば母人と思ひ忍れて深く
善く前後もまかせども母も跡く敷ともさ
あられ姫さもある不よの年の中のさ
白き絹をもとびつけ。あくるお持くるものわざ
甲ばかりとつりくるる祇は。欽明天皇の御時。
大伴の佐提比古。遣唐使りてそのりの渡し

時妻のさよ姫か名跡をおしミ松浦山への形見のさ
ゝのはしとさかさを母と姫とし見まいらせてま
さうに女の口ながとよれ国家のかたちおし心まん
ぬさかりなるとしもそふれずられ語のやす
人に語ならしゆしさるにみとおもひ切人たる
しかせん仕出事を語り出し二度抱とおもふ
いかにもくるしきに親はおもふまゝにせぬ道
もやかて語の物語まれなんそも浮らよか
またよを女房をせめて一目見たきやと嘆さ
かかさ三年わひられ涙しぬ契りおもひ

[illegible]まりて気ならず理なりしに海をなぞし袖をとま
ゆりきり終に江雪入道の事我小田原にある
てよく存しかばたとへ打ひわれたるよりは江
雪斎終まて北家の縁をはなる中にかれば
氏直やかて酒宴の時ぢに江雪法しその北
家と終なりはしめる人にて称てまいられ
宏弁舌人にもすぐれたる上仁義の道くわし文
武にも達せし人也ゆへ北条家の時も氏直三一門
家老衆の中にくらゐ見舞ひさ一年秀吉公在
世の時氏直使者として江雪入道上洛せられしに

秀吉公對面ありしに甲着とて九孔義乃次才
巖窟也と疏感ありしと也氏政没落の後秀吉公へ
めし出され横田誓江雪山男乃何侍ひ女人ハ常に孔
もれしの流わひてゐ事しれたまり総に八丈嶋乃女
房ありしざる事古さ文よりもかんくもどされ九月安
集の題号を通じ久世来拖清を記し侍る也

○清水太郎右衛門大力の事

見しきむかし伊豆乃國乃住人清水上野守ハ小
田原小源家譜代の侍関八州にも名をえたる武
士なりされバ上野守が妻女山上の社氏神へ宮

詣ありしが参詣ある途中の坂にて牛数拾を二俵
つませけるまで見れバわしと足二つをかけへ
おし岩角に儀りて首る荷縄を切るが
牛谷へ落て死もへしと引上べき様なく不便が
る者ならび女房見をこくわさぬの者そのを
一人とむへらバ牛とそのつるを切ぶひて中へ指上
道中に牛を立させけるに女乃力にハ人あのわざに非
ずと人々感せけるも腹に男子一人ありて清水太良
左衛門尉見なりが母の力を請次ぎ大力の名をとえ
里或時太郎左衛門甲斐国より小馬を一疋

朽ニ月に大豆を一升くらひ悪馬なりしゆへ乗りの
なし。馬なりの内を出ず母は中島六七人ありく。総
を付く毒出さ誹りく事なしか。然大炊左衛門
此馬にのり飛廻る。鞭を打て引にしか所々を持てとむ
るといへ共立所にて血を吐て死せり。右は左衛門地なりける
総を付て乗べし。然ど慈言をもつて忠節に教致の
合戦にも乞をうけ。強とくて先敵をなびらし味
方を伝もうけ。剛者の名残えてうちさ。駿河の国中
長久保の城主なり。甲州信玄勝頼父子と
うひ汁井に一度もそくれをとらざる人なり。抑

一年信玄ご参州源家康公とのたゝかひの時ぶ浜松
出より氏政へ加勢をたのみ給ふ。依てかれにより付て大藤式部
少輔清水太郎左衛門尉安大将として二千騎の軍
兵を卒し。信玄ふともせくして戦ふ。元亀三年
壬申十二月廿二日申の刻りに討て家康公ご参州
味方が原の合戦に信玄勝利をえられしなり。
此時大藤式部少輔は討死も太郎左衛門尉ざい
をふく諸卒をいさめ。樊噲をあふかりてさ
きつるにより。敵をいだんらる。ちも中りて全の
馬よりひろけ。それ子井に打りの粧見ぶる武者一

騎犬人とはげしくて郎従あまたかけ落行を
太郎左衛門尉是を見て駒に鞭うてのりまはし
じ也。犬声をあげてよびかくるは鳴神のごとし。
郎従おひいさみひるまぬをそれ左右へ分て逃退く
と付甲のまへろをはさんで引返し錣の前輪に
おし付て頸おとしたぐり取首を太刀
左馬射と云て大刀の名をえたり

○蟇矢軍の事

見しよ昔関東諸国に弓矢を売東西南北に
と以くせうひあんことなし。衣服にわよ待つる人

鉄炮とみゆる紙葉をあつめ弓の弦をはなし矢を
継て其座敷をみて木綿をけ付るにこそは
むかしは又鉄炮と木綿のごとく計のへだてとの
かはりく継る矢の根ともに是をすやさしく名付
毎年七月には七夕の矢と号し大名小名寄り
役にて主人へ上るに十節の内又は八十やさぞ又つゐを
木弓は流の是も毅矢と名付られしを呼名
鉄炮へ火なく弓は扱ひし日ごとの矢をひに
矢継過ければ主人へも矢新と諸侍へくだるは
今も敵を手へ寄る時は矢来引強弓を

えらび矢じりと書付たる征矢をもて敵のかた
へを射くりけれバ是を何事といふに天正七年
の秋武田勝頼伊豆の国に出て進発し浮嶋
原三枚橋に陣をとる北條氏直も出馬し伊豆の
国に出張が原三嶋にて立て對陣を張てさ
ひをまもりていくさもなく月日も暮れバ先手の
者敵陣へ夜討をしかけるにも是をしりて国への
案内をよく知りたる忍の者ありけるに武
名を乱波と名付国大名競て持て敵へ夜討
の時ハ是を先立させ敵の陣へ入りて灯火を消

て敵のありかをしらべ道に迷はせ足軽共五十も百
も二百も三百も伴ひ敵国へ忍び入て或時ハ敵
討分捕高名し或時ハ焼働へもし藪原草村の
中に隠れ居て毎夜敵をうかゞひ何事にても
あハされバ悦びを敵にしらせども絶ざる事をかま
里人是をしのびともくさとも名付て敵ハ是の
ひよりといふものをはかりてとらふもの
をくさ忍びと云二字をしのびとよむ或文に竊
盗の夜盗ハ人の家に忍び上手にて竊
盗の二字をしのびとよむ也なり故又

くさといふ字を家とよりは其の士卒敵中にま
境目へ行ば書も草にて計て敵をまもらしむるを草
計ともいひ是を略して草と名付るなり
総じて草といふ字を書べきは今の時代の法なり
こと云義なれば犯したる陣中終夜篝を焼
敵の油断を見すまし其の兵士に境目へ日々出向て
陣をとり若者の待かまへ又くぐりなど
陣中をぬすんで敵陣の目へたびたびまで
出あひ矢いくさとなる事もあり然して討あふ
其ときは軍なる事は先手の役なり

日々のうちにかひありて仕場居のを隠に或ハかくれ
の地あり或ハ森林藪せこにかくしおき其の
人数計ぐるさが敵の斥候ならとびふた境目を
ふとこれを事なかれ経る双方心をつくして
味方無勢なれば士卒をくくみかするにかぜて歩
立の者ども出向ふ馬上も二十騎三十騎をせ
加へて下知をさつけたまひつ事も乱をる
御前登と云ふ者は首をとりつぎ武勇の
在着共略を受て首引に目を付るものか
條義ある氏親家中にて杉木左京亮ハ

きこゆる強弓なり。先登にすゝみけれバもなれ矢参。
大ぶくらとのまゝとり事なく。忽射殺しけれバ
者多し。是を見て敵方より武者一騎逃来。
吉本角蔵と名のり左京亮と渡りあひ
ねらふ所ひとつ矢をうちもさむ。左京亮敵の弓
を引ざるさきにはやうど射る。此矢あやまたず角蔵が
乃腸よりひを射さとしのぶよりかへる
ひるむところを左京亮痛手なりけれバ叶ハずして
ひき退く。左京亮又二つの矢を放ちけり。射る馬
のふとばらにあたりて馬ハたふれけり。

さひけれバ角蔵馬上より落ける。味方是を見て。
勝ざさをどりと悦び。仕合よきを見の。矢軍の勝負
の験也として。双方の士卒おのおの引しかバ。陣を
立さりしが。一しきり敵がさとりなしかバ一人弓に矢を
乃ひて味方の陣まちかく寄かくいへる。是へまうし
出る者ハ先陣のをさむかひにまかせて馬上より射お
とされし吉本角蔵が使者也。矢本に相模乃國
三浦の住人鈴木左京亮とあり。察兵の射たる敵を
うち答くれなしぞ。それ戦場に出て討もらすく
も武士の名誉ならむや。もかむ仲の情也。様又軍ハかなわざ

一方ハ一方なく。あるべくこそ日の運命の厚薄に
あるべけれバ。負(まけ)たりとて恥辱(ちじよく)にあるべからずと。然に
上月角蔵ハおそる所の矢へはや。その数矢(かずや)也。流る
目がけて名乗(なのる)ことをとゞめ。わざむく(?)続合(?)をとこ
ある遠根(いえ)なんとなし。組(?)弓月の軍(いくさ)に。矢(や)ぶみ流さ
せるにや。かへてもて。角蔵と月。沼(?)木左京亮(すけ)殿と
兼(えんくハい)云の志なしに。送り(?)をさへ(?)として名字(こうじ)書付(かきつけ)させ
家(?)。鏑矢(かぶらや)二筋射(い)ておくとそ。か左京亮(すけ)は矢(や)を請取(うけとり)使
者(しや)に向(むか)ひ云。此(せん)陣(ぢん)のうけおふ数矢(かずや)とりて射(い)なすべし
一、さくの狼煙(らうせん)の後にまわるとも。我が敵(てき)を射かけ。矢を

打流(?)びひぞる時刻(とこく)に。末木角左衛門(かどさくぐゑもん)感外(かんぐハい)に。馳(ろせ)来
て。それより弓を取り向ひ。矢で(?)に矢(?)参(くハいさう)の仕合也
然(ぞんざい)遠根(いえ)に。ちかひ弦に(?)ちて。打(?)持合せしとて鋼(?)
よき(?)矢羽(やはず)かけ失(?)大下(おろし)たる。大鳥服(かりまた)の根(ぬ)を二筋(すぢ)
抜(ぬき)出して射(い)ぬきて。諸人見てもとく。義を(?)ちなる(?)(もぢ)(てき)
なりくなる。武士(もののふ)の振舞(ふるまい)ぞとぞ。たゞべきなれど。敵(てき)を
味方(みかた)も感悦(かんえつ)せり

○松尾(まつのお)の茶(ちや)への事 付 山上宗二(がそう)事

凡上古今。世上に大人(だいじん)も小人(せう)も茶湯(ちやのゆ)をもてあそび
結ひ(?)ねぶ(?)江戸の町(?)母も俵(?)数奇(すき)をやぶと見えたり。

宮に岩屋宗琢と云人いひけるは此頃城大名松尾
どのハ天下无双の御茶へと。黄金多く求め買取りぬ。
世の茶あまた見あつめ所持ありしに。名物の一筋あり。
ともるに茶湯思ひたなるやうに茶まで走りしさ。めて
茶などものへたいしと。たゞし人ハ執着しなふ根にも此茶
へと一月ばかりにて抛捨なり。それを下さうしてまなび。
それわきふとも。珍数の道をせめてぞ一おハ家財に
かへてまねびしてハ益ありまじ。昔宮十石の所づの
ごとハ我人ハ此茶がとをもつて。秘蔵せる所に千分の
御捨と云人。末宮十石の田地に取りへて。茶湯をと

やるとしるゝ所に東山殿より此名家財をたれがと
くさる心ざし。是しそ其実の数寄者ならぬと所感るを
て後ハ御物に召されて十石と名付て。乱後にこの
流が茶入の轄屋紹鴎といふ人に渡り。を堺宗納
所持なりしを後に関白秀次へめしよせられ天下に比類なき
き名物なりと諸大名安といふ人ハ此たひをもて日さ
まひくへもらし堺に宗の宗易山上宗二と云て世に
やさしき数寄者ありしが。秀吉公の御代に。宗易ハたる
物ありて宗二ハ耳鼻をそがれ。流人と成て関東
にて下りしを北関八州の守護北條氏政に田氏によし

湯も数寄者の時花なれば諸人家に二とある数
寄ハ去年小田原籠城の比までハ一両ほどにて家
二物とゝのへしが近頃茶湯に越して書物
をもならべ所もなし。そのうへ掛物の名物とてはくべき
なほ上々の数寄者に至て金をしるし。畫賛
湯よりも貴ねまきが是則所通なり。上数寄者の
覚悟禅家をもとむるとも、今ハ数寄の名人と云ハ珠
光引物。紹鴎ハ其の人也。珠光の一紙目録といふ
物ハ能所作月明の大事ハ。往古の時の日記なり。
それに引物。宗珠。紹鴎などの追加せられたる一書

なりさがりはとがむべしとぞ。むかしの名物類ある中に。
三月の比つかと申かかへてこそ、そしり給ひと
て名付給へり。松嶋ハあまた三十余りの島。奥州の名所。
松嶋になぞらへ島多く。面白きことを名に寄せり。
かざしこハ隣家ば此がひと子のごとく釣夕なでさ
まち給へるによりて名付。ひとそ子へ。東山殿由緒んじ
て是ハどのやうに名の元紀に推子おそるるとの道
ゐしふしてなりぎれがの茶ハいけ上に霜のふり
さう縁に松しろきなり。武将心敬朝夕の割。ふさ盆に
付て発句を仕べきとし絶なり御座候に

篠かけ構り霜をくわしくいはしせられたり
寅申ハ天王寺の市なくれ此ハ天王寺かん
市ハ寅の日と申の日立市なれハかく名をよびたり。
むかし此ハ山家にて並べ持来の時分ともなし給ひぬ。
是つがを此時ゟ名
まうちゃんねハわすれのちり三よとこし斉
此く名付たるハ山外家の名物茶入茶壺水指
花入釜香炉香合のくさいかれ丸わけて並しがたし。
是皆ひとし山家の内ゟとりこの名物各自明とりて見え
此の外の道具ハ是も茶ハ茶釜ゟ盦かよりまで

善悪ともなり又ハ其て湯の加減よりハ茶の精。
焔毛浅深わり湯の沸るハ六調子の沸井。蚯音車
声松風真眼驚涙。声母さい声母の時分付けハ二への口
味わひとまなしハ上数寄をやも知れかるべし。古今唐
物を集めかざりて数寄せもる人へを大名どうさしと名付。
又かれを持く目もさて茶湯を上手。右の三ケ除
調子るをば数寄一道の名人とりて又一物も持せ
志ての胸の覚悟一つ不飛多一つ手がかりハ三ケ除調
称もんを茶湯者と云とかしされし是皆茶二の名
語也。徳ぎさんハ茶湯の為名を價のあるさ高きをえる

也へりとも。損又数寄なるを常にかんがへ。縁にふれて
求むる所を臓とせずとも、珍らしく、珍肴美膳とても
こゝをもつて外見をせず。たゞ清浄なるべく。雖いかゞ
気味を好むべからず。茶湯は殊妙のかたちさへ是非に
上下の礼儀なるべき事をしるしおかれしとぞ。其よく〳〵
書見しかり

○前陣軍に討負二陣なく切る事

比々しも。昔老士語りけるは。殺数度の軍にあひし
是犬合戦においては。かならず一勝負也。有無の二つに
さはまる也。先陣の者ならず死一生にきはまるとぞいひける

勲しむともわさとむしく。討負をいはくよむくへに
くれ鐵砲共もとられ。是犬合戦に崩れ行て
も事付いかに。殿に小田原北条家五代の内。数度の
大合戦に。討勝ちら損又味方負る事ありき。
流井に一度も。犬負なし。是定とうゐて一命の法度
なく。関がはなれし。それいらぬをなれしをねての軍法
おそかへし一くに。後にならぬとも。一町あまて行。
一統への内。前後に武者あまりまぬとても着
まんぞくのならり。そかへの内へ追へくし出る者あれば
わこさのなり。とさへ下知をとも。上旗かへ撿使

どして。雑馬の武者。並陣を馳廻て。敵陣一町でう
かゝる時よ。紛る者わきまへば。是非を論ぜず切捨る
故に味方の先陣軍に討負敗北すとも。二陣
の武者なりとも先立く備へをとゞめ矢ごろよ立鑓
を組て。敵を待。味方く引きかへて。待所の味
方の陣さきよりをとそれ左右へ分て其いきほひ其。若
そるで。ふけてんともろ者わきまへば切て捨る也
一人も入得ず敵から軍となればかならず鉾矢
飛に追来る後に味方待請る。勢ひと見へて。
かなはずと。前登よてむ者。引かしめれぬ強

まりかりども悉く敗軍せずして叶はぬ也。
北條家の軍二陣あく切なりと事なくはてず。
かりんでくしろ享禄三年庚寅。六月十二日。武州
小沢原にて。管領上杉朝興と北條氏綱合
戦ふ。味方の前陣討負るといへども。二陣まて切
ぬけし余人討れ。猶又氏康ご。里見義弘
総の国府台戦ふ。先陣討負るといへ
ども二陣にて切なし。大勝利の軍法は
氏綱時代。この北條家よりいくさ是を
用る。軍に大負わろく。陣を乱もちなとで一合

戦切勝といふハ新手の敵に二度切勝ち
叶べしといへども人馬どもに筋力つかれぬれバいさかひ
をうしなふによつて也たとへ勝いくさに長
途をするハ不可也士卒おのれが手に首
をとらんと力のつかれるをもいさまへども首を
ひろふ時に敵かくれたる藪せこより又人二
人もうち出て矢石をとばすれつよくハさりとも
敵むかふと見て前なる者一人引ぬれバ
あとの者どもみなくづれて猛きも付
其上とても山人百姓おそひかゝりて殺も

て麻弓を射かけなどして大崩れする事ひつ
せうなれバ兵法一極には定なくあやうき時にのぞんで世
事にわが軍には勝てもくる事を負ての事
多き也ゆへに君命をもかろんじ帥令を
も用ひず敵によりて勝負を論ずそれ
どんなる軍兵をかへりみず公私の縁にも付て
叶ものにハ討死し逃るべからずと親子を
もすて後日の出世をも思ふべきなり是を仁義の
勇士といふなりしかしとて逃るべからずといふ
ばれども討死する八義にも背くなり是を血気の勇といふ。

一方の武勇を望むものは場所を知り時要也。人を
見ぬ所にくやなげをなして。討死するは犬死なり
古詩あり
見る人もなくてちりぬる奥山の。紅葉は夜るの
錦なりけりとよみしも是によそへて知るべし。出
世のほまれある人の見る所なりとて万人にすぐれて。武
勇をもはげます也。討死する者は武名を子孫に
つたへし。ほまれある人の一言は俗士の千言に
まさるべし。それゆえに秀吉公時代。濃州柳
瀬の合戦に。世に鑓といはれしは加藤肥後
守。同左馬助。福島左衛門大夫。脇坂中務。糟屋内
膳正。平野遠江守。片桐市正。併の七人也。この
人々大名に成しの後名也。是よりも此戦場にてお
登りをとむる也。是を上の誉とうなり。大勇と
小勇との二品有り。文を学び武をよしとゝむるんで
智謀芸術をもつてしらしむるを大とせし。万
人に勝事をなるを大勇といひ。程けるを
を首とし人の前にあらはしむ。その手柄でまれとも
なえさひて討勝とは小勇と名付はかりんへと備
ふ。源九郎義経。ひとりけりとある

とせり。平家一の谷に城をかまへて西ハ鵯越とて
いかなる人力のおよばぬ高山なり。義経ひとり先
にて逆落しに下知せられければ勢みなおちて後
平家讃岐国に城をかまへ源氏の軍兵数百
艘の兵船を用意し。渡海せんとせしところに波
風あらくして諸船おそれけれど義経公平家を討
使の宣旨をうけたまはり。悪風なりとも渡海を
ためらふまじ。運ハ天にありと。主ひとり元暦二年
二月十六日ごとも纜をといて一艘出しけれハ下知あり
給ふ。而上又讃岐国に着岸して平家をとせ

討ほろぼし給ふ。是ハ血気の小勇のなすところなれバ大
将のなすべき所にあらず不可也。然るに義経ハ人のいさ
めをも用ひず。無理に渡らんとて海をわたりかく
のごとく義経独歩の自をさしはさみ。万事不
義なるゆへ。頼朝公と不快になりて宮
せられ給ひぬ。扨又頼朝公は佐竹の冠者義秀が
城を責らる。直実ハ一万人にぬきんでてはげしく
里が首を討れ。摂州一谷の城をせむる
時直実ハ夜中に先陣をまかり卯の刻門外にて
すゝみ。源氏の侍熊谷次郎直実先陣とさけぶ

小名の家。城中にも出陣と申ス。北條三郎左衛門尉
盛次は悪七兵衛。景清。左衛門尉などの殿切て出ける。
此実は勇士にてあらしかれ共。天下無双の剛者と歎
朝なりし事。左もなくとよりばされたる楓がしらの
役は後に郷付しければ。桜敷次郎。京庵土肥次郎
実平を始め。一方の大将として。あらむとこそ見えたれ軍兵
の統領を取り。下知をなす事。教家なとかは式
あるなく人。智略兵術を備へたる故なり。それ大将
たる者は。文を学び。黄石公が伝へし所を。
秘くはしく。呉子。孫子が秘書に至るまでを備へ

軍兵を下知せよ。論語に三軍の師を奪ふべし。匹夫
の志ざしをば奪ふべからずとこそ云へかさんど。かれとも
人は文を学び。功者にまじはりて武略を学ぶべし
馬をのり。さし物なども。我力にあはせて
色。かたちにわざはひを招くべし。兜に立物は
元。功者の嗜みなり。歩立の軍。山坂にて
見ひ。是が実なり。
是せり

北條五代記第六終

110X
231
10